

中央値（メジアン）とは？

求め方と代表値のメリットとデメリット

中央値(メジアン) とは

「中央値」とは、「データを小さい順に並べたときの、真ん中の値のこと」だよ。英語では「メジアン」と言って、つづりは「median」と書くよ。

洋服の「M」サイズって、「ミディアム (medium)」の略で、大中小の「中」のことだよな。

この「ミディアム」と「メジアン」は同じ仲間の言葉なんだ。

medianとmediumで、つづりも似ているよね。

ミディアムのことを思い出せば、「中央値＝メジアン」と覚えやすくなるね。

これまでデータの表し方について、「平均値」や「最頻値」も学習してきたけれど、「中央値」が一番まちがえやすいよ。

だから、テストにはよく出題されるんだ。ここでしっかりおさえておこうね。

5人のテストの点数の中央値を考えよう

それではさっそく「中央値」とはどういうものかくわしく見ていこう。例えば、下のような5人のテストの点数があったとするよ。

5点・6点・8点・10点・11点

この5人のテストの点数の中央値は「8点」ということになるよ。



だって、5つの点数のデータを点数の小さい順に並べたときに、「8」がちょうど真ん中になるからね。



このように、データが奇数個（3、5、7個・・・）のときは、中央値を見つけるのは簡単だね。

6人の点数の中央値を考えよう。

それでは、今度は6人のテストの点数があったとするよ。

5点・6点・8点・9点・10点・11点

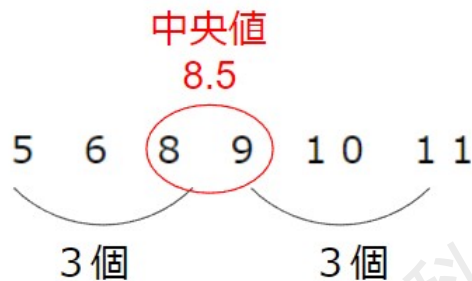
さっきと同じように考えたいところだけれど、今度はデータが偶数個なので、小さい順に並べたときに「ちょうど真ん中は8なのか9なのかどっち？」となってしまって選べないよね。

そういうときは、

真ん中の2つの数字の平均（2つの数字を足して2で割った数）が中央値になるんだ。



今回の場合は、真ん中2つの「8」と「9」を足して2で割った「8.5」が中央値になるということだね。



データが偶数個（2、4、6個・・・）のときは、中央値を見つけるのは少し複雑だね。

中央値の求め方

中央値の求め方は、データの数が奇数の場合と偶数の場合で見つけ方が変わってくるよ。

データの数が奇数の場合

データのちょうど真ん中の1つの数がそのまま中央値になる。



データの数が偶数の場合

データの真ん中の2つの数を足して、2で割った数が中央値になる。



中央値を求める問題

8人の漢字テストの点数です。中央値を求めなさい。

4 8 3 9 4 7 6 1 (点)

中央値っていうのは、小さい順に並べたときの真ん中の値だったよね。
だから、まず小さい順に並べることから始めよう。

1 3 4 4 6 7 8 9

こうしたら真ん中の値は4と6だよね。
真ん中の値が2つあるときは、2つをたして2で割ればいいから、
 $(4 + 6) \div 2 = 5$

中央値が5点になることがわかったね。

9人の漢字テストの点数です。中央値を求めなさい。

4 8 3 9 4 7 6 1 2 (点)

中央値っていうのは、小さい順に並べたときの真ん中の値だったよね。
だから、まず小さい順に並べることから始めよう。

1 2 3 4 5 6 7 8 9

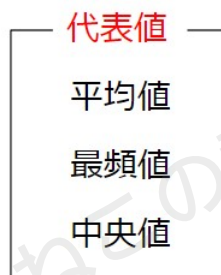
こうしたら真ん中の値は5点だから
中央値は5点になることがわかったね。



代表値とは

代表値とは、データがたくさんあるときに、「そのデータの特徴」を簡単につかむときに使う値のことだよ。

代表値には、「平均値」「最頻値」「中央値」の3つがあるんだ。



なんで「代表」という名前がついているのか、そしてどうして代表値を求める必要があるのかを説明するね。

データの特徴を調べたり伝えたりするときには、平均値や最頻値や中央値のうち、1つの値で代表させて、それらを比較することがあるんだ。

たとえば、学校の定期テストを生徒200人が受けたとして、「15点」の子がいたり、「90点」の子がいたり、データをひとつひとつ見ているだけでは特徴がつかみづらいよね。

「そのテストって、難しかったの？」と聞かれた時に、「15点しか取れなかった子がいる」と思えば難しいように思うけれど、「90点」の子もいると考えると、もしかしたら簡単だったのかもかもしれないしね。

そんなとき、「平均点」を求めて、それが「40点」だったと分かったらどうだろう？

「けっこう難しかったんだね。」と考えることができるよね。

そして、「90点を取ったなんて、すごいね！」とも思えるよね。



テストAとテストBがあったときに、テストAの平均点は「30点」で、テストBの平均点は「80点」だったら、テストAの方が難しいテストなんだな、と判断することができるよね。

このように、データの「代表値」を求めることで、データの特徴をつかんだり、データを比較することができるんだ。

では、なぜ「平均値」「最頻値」「中央値」の3つも代表値の種類があるんだろう。

それは、それぞれ得意なことと苦手なこと（メリットとデメリット）があるからだよ。

「平均値」「最頻値」「中央値」それぞれのメリットとデメリット

まずは、「平均値」「最頻値」「中央値」とはそれぞれどういうものか、もういちど確認してみよう。

代表値とは

- ・ 平均値：平均と同じで、合計を個数（データの数）で割った値（データ全体を平らにしたときの値）
- ・ 最頻値：もっとも多く出てくる値
- ・ 中央値：データを小さい順に並べたときの真ん中の値



代表値	計算方法	メリット	デメリット
平均値	合計÷個数	全てのデータをもとに算出できる	外れ値の影響を受けやすい
最頻値	もっとも多く出てくる値を求める (度数分布表の場合、もっとも度数が大きい階級値になる)	外れ値の影響を受けにくい	・複数のデータが最頻値になる場合がある ・データの数が少ないと最頻値を求めることができない(すべてが「1つ」しか出ないなど)
中央値	データを大きさ順(小さい順)に並べたときに真ん中にある値(偶数個のデータの場合は、真ん中2つの数の合計÷2)	外れ値の影響を受けにくい	外れ値の影響を受けにくい反面、全てのデータを反映しているとはいえない

平均値のメリットとデメリット

平均値のメリットは、なんといっても「全てのデータをもとにしている」こと。

たとえば、あるクラスのテストの点数について、ほとんどみんなが10点前後しかとれなかった中、A君だけが100点をとれた場合を考えてみよう。

平均点をもとめるときに、「A君の100点は無かったことにしよう」なんてしないよね。

ちゃんと全てのデータをもとに算出するから、公平だね。

ではデメリットは何かと言うと、外れ値に影響を受けやすいこと。外れ値とは、「極端に外れている値」のことだったね。



たとえば、ほとんどみんなが10点前後の中、A君の100点って、ちょっと外れているよね。

A君の100点を含めて平均値を求めるので、平均値（平均点）は高めになるよね。

平均点を見ただけでは「みんな10点しか取れないくらい難しいテストだったんだ」ということには気が付けないね。

最頻値のメリットとデメリット

平均値にくらべて、最頻値は外れ値の影響を受けにくいよ。

たとえば、さっきのテストの点数の例で考えると、20人の生徒がテストを受けていて、そのうち「10点」をとった人がいちばん多いとするよね。

そうすると、最頻値の「10点」がそのデータの代表値になるね。

さっきのように100点のような外れ値があっても、外れ値の数が少ない限り問題はないよね（そもそも、数が少ないから外れ値なんだよね）。

そんな最頻値の弱点は、「あるていどデータの数がないと、最頻値が求められない」こと。

なぜなら、データの数がじゅうぶんないと、「いちばん多い値」を探すのに、「どのデータも1つずつしかない」なんてこともあるんだ。

そのほかにも、「10点が5人、20点も5人」のように、多い数の値が複数になってしまって、1つに決めることができないなんてこともあるよ。



中央値のメリットとデメリット

中央値も、外れ値の影響を受けにくいよ。

なぜなら、外れ値って、データを大きさ順に並べた場合、いちばん小さいか大きいかのどちらかで、「外側」にあるよね。

だから、「真ん中」を選ぶ中央値なら、外れ値が影響することはほぼ無いんだ。

でもその分、外れ値がほとんど「無かったこと」のようになってしまうのがデメリットだよ。

「平均値」「最頻値」「中央値」それぞれの特徴とメリット・デメリットをわかったうえで、「そのデータの特徴をあらわすのには、どの代表値を使うのがよいか？」と考える必要があるね。



「中央値（メジアン）」と代表値まとめ

- ・ 中央値とはデータを小さい順に並べたときの真ん中の値
- ・ データの数が奇数の場合の中央値は



- ・ データの数が偶数の場合の中央値は



- ・ 中央値・平均値・最頻値をまとめて代表値という

